安田淳君学位請求論文審査報告

停戦後七十年を経過しても、朝鮮戦争に対する関心は薄れてはいない。それはこの戦争が第二次大戦後の世界において最も規模の大きい戦争であったことだけによるのではない。南北朝鮮の分断という悲劇的状態を決定的なものするとともに、この戦争を通じて確固たるものとなった米中対立の構図が、現在に至っても解消されないどころか、かえって緊張をはらんだものとなっていることにもよるのである。今日の中国においては、中国が兵器・装備において圧倒的優位に立つ米国に「勝利した」戦争として、この戦争を美化する動きさえみられる。そのため、学術的な研究から通俗的な読み物に至るまで、朝鮮戦争をめぐる中国の出版物は増えるいっぽうであり、資料の洪水のなかで何が事実であったかを見極める作業は、かえって難しくなっている。

この戦争に対する中国の関与をめぐる研究史からいえば、研究者たちは一九五〇年秋の参戦決定にもっとも強い関心を寄せてきたが、他方、戦争を終結させるための中国の努力に対して向けられた関心は相対的に小さいものにとどまってきた。それは停戦交渉の当事者である中朝側が、実際には北京、平壌、モスクワという団結してはいるが同時に矛盾を含んだ三者からなる複雑な主体であったこと、また資料の公開が進んでこなかったという事情を反映している。だが、近年ようやく毛沢東、金日成、スターリンの間で交わされた電文が利用可能となるなど、停戦交渉の過程を子細に検討するための条件が整いつつある。安田君の論文は、近年利用可能となった膨大な資料の読解を通じて、中国の朝鮮戦争に対する関与、とくに北京の停戦交渉に対する態度とその変化を具体的な軍事状況の推移と関連づけて明らかにしようとした意欲的作品である。

本論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

序　章　問題の所在

第一節　はじめに

第二節　二〇世紀終盤の中国における朝鮮戦争研究

第三節　二〇世紀終盤の中国における朝鮮戦争研究の

注目すべき成果と可能性
第四節　二一世紀初頭の中国における朝鮮戦争研究
第五節　中国の朝鮮戦争研究における新たな視点
第六節　本研究の意義と仮説
第一章　中国建国初期の安全保障と朝鮮戦争への介入
第一節　問題の所在
第二節　毛沢東と周恩来の認識――「帝国主義」と台湾「解放」
第三節　「東北辺防軍」の編成と参戦準備
第四節　防空態勢の整備にみる脅威への対処
第五節　軍隊の整備と安全保障構想
第六節　結　語
第二章　中国の朝鮮戦争参戦問題
第一節　問題の所在
第二節　周恩来のソ連訪問と参戦の再検討
第三節　中ソ間の事前協議
第四節　志願軍の準備不足
第五節　戦況逆転の予測――一九五〇年夏
第六節　国連軍の仁川上陸と参戦の決意――一九五〇年九月下旬
第七節　参戦決定と国内状況
第八節　結　語
第三章　第一次、第二次戦役――北緯三八度線と停戦協議
第一節　問題の所在
第二節　第一次戦役
第三節　第二次戦役
第四節　第三次戦役の準備と三八度線の意義
第五節　中国の国連外交と三八度線の意義
第六節　結　語
第四章　第三次～五次戦役――停戦交渉への軍事過程
第一節　問題の所在
第二節　第三次戦役
（一）　三八度線の突破と進攻の停止
（二）　交渉受諾の兆候と朝鮮「解放」への不安
第三節　第四次戦役
（一）　第一段階――後退と長期戦への備え
（二）　第二段階――主導権の奪回へ向けて
第四節　第五次戦役
（一）　第一段階――三八度線再突破
（二）　第二段階――意図と能力の葛藤
第五節　結語――交渉受諾の決定

第五章　停戦交渉の開始に関する一考察
第一節　問題の所在
第二節　高崗・金日成のモスクワ訪問――一九五一年六月
第三節　ソ連への兵器援助要請
第四節　停戦交渉に向けた軍事方針――三八度線の回復
第五節　交渉開始の受諾――停戦条件協議のための交渉
第六節　中国の交渉方針
第七節　結　語
第六章　外国軍隊撤退問題と軍事分界線交渉
第一節　問題の所在
第二節　議案をめぐる対立
第三節　中国側譲歩の始まり
第四節　疑問の残る中朝関係
第五節　軍事分界線交渉の開始
第六節　さらなる中国側譲歩への動き
第七節　結　語
第七章　軍事分界線交渉と軍事過程
第一節　問題の所在
第二節　交渉再開をめぐる中朝側の譲歩
第三節　第六次戦役の中止
第四節　国連軍の夏季・秋季攻勢
第五節　軍事分界線交渉の妥結
第六節　結　語
第八章　問題の収斂と交渉の政治問題化
第一節　問題の所在
第二節　第三議題をめぐって――中国の戦略転換
第三節　第五議題――「等」の問題
第四節　軍事情勢――陣地戦戦術確立と政治への反映
第五節　結　語
第九章　捕虜送還問題と軍事過程
第一節　問題の所在
第二節　捕虜送還問題の始まり
第三節　双方の譲歩と中国の驚き
第四節　中朝側のジレンマ――交渉継続の願いと反発
第五節　軍事情勢――志願軍による限定的な戦役の発動
第六節　結　語
第十章　朝鮮戦争後期における中国人民志願軍――対着上陸作戦の懸念と準備行動

第一節　問題の所在
第二節　着上陸作戦の懸念と対応準備
第三節　ソ連への支援要請と中ソ関係
第四節　「政治動員」発動の重要性と必要性
第五節　兵站・補給の復旧と確保
第六節　対着上陸作戦のための海空軍力
第七節　結　語
終　章　結　論
第一節　研究の意義
第二節　研究のまとめ
第三節　結　論
参考文献

各章の概要

序章においては、本論の目的が述べられている。安田君によれば、朝鮮戦争への中国の介入は、もちろん中国において膨大な研究蓄積があるものの、政治的な要請のために、現在に至るも、それらはおおむね画一的な内容にとどまっているという。政治的要請とは、この戦争に対する毛沢東の判断と政策を称賛し、近現代史においてつねに帝国主義の被害者であり続けた中国が、アメリカに「打ち勝った」ことを自画自賛することである。そのため、中国における従来の研究は、一定の枠を踏み越えることができず、中国の介入に関する基本的な事実が解明されているとはいいがたい。例えば、中国にとって、この戦争を通じて朝鮮半島を統一することが目的であったのか、それとも北朝鮮の崩壊を防ぎ存続させることを目的としたのか。参戦準備工作は比較的早く行われていたのに、なぜ後勤工作が参戦した翌年になってようやく本格化されるのか。軍事よりも政治を重視する毛沢東の判断が停戦を引き延ばしてしまったのか、などといった問題である。しかも、朝鮮戦争に関して書かれたおびただしい数の「紀実文学」（出典が明示されない、文学とも歴史研究ともつかない読み物で、ときには職業的歴史家もこの分野に参入する）が、事実の探求の障害物として立ちはだかっている。かくして、安田君は中国共産党が朝鮮戦争を「どのように認識し、なぜ朝鮮戦争に介入し、そこに何を望み、そこで何を達成したか」という根源的な疑問に立ち返って、この戦争への中国の介入を再検討する必要があると主張している。

第一章は、中華人民共和国建国前後における安全保障に関する指導者たちの基本的な考え方について考察を加えたものである。一九四九年初、毛沢東は革命戦争に勝利しつ

つある中国共産党にとって、米帝国主義こそが究極的な敵となりうるとの認識を示した。そして彼は、朝鮮戦争勃発直後、米海軍第七艦隊が台湾海峡に出動したことをとらえて、米国による台湾「侵略」の始まりと理解した。周恩来もまた一九五〇年六月二七日のトルーマン声明を、米国政府が武力によって中国共産党の台湾「解放」を阻止することを宣言したものとみなした。すなわち、同党指導部の認識においては、米国の朝鮮戦争への介入は、中国共産党による台湾「解放」の阻止とほぼ同義であった。したがって、台湾「解放」を最終目的に定める同党にとって、その前に立ちふさがる敵を除去するという意味で、アメリカは能動的に立ち向かわなければならない相手であった。かくして、朝鮮半島でアメリカ軍と戦うことは、中国にとってほぼ避けがたい運命であったと安田君は示唆する。そのため、戦争勃発後、朝鮮人民軍が破竹の進撃を続けている一九五〇年夏、参戦を決意した中国共産党は、東北辺防軍を新たに編成し、後方支援体制を整え、防空体制を整備した。参戦はスターリンによって押し付けられたというより、中国共産党が自ら進んで選択したものであると安田君は主張している。

だが、たとえ毛沢東がアメリカとの戦争を決意したとしても、それが中国共産党の集合的な意志となるまでには曲折があった。第二章は、一九五〇年秋、中国が最終的に参戦を決定するに至るまでの過程が検討されている。従来の説によれば、中国の参戦決定は同年一〇月であったとされているが、安田君はさまざまな資料を総合的に検討すれば、九月下旬とみるのが妥当であると主張する。それは国連軍総司令官マッカーサーによる仁川上陸作戦の成功による戦況の急激な悪化を反映していたのであった。その後、一〇月八日に人民志願軍編成命令が下されたものの、その四日後には、何らかの理由によって参戦それ自体に再検討が加えられた。関係者の証言が食い違っているため、その理由を明らかにすることは困難であるが、安田君は少なくともソ連から空軍派遣を拒否されたためではなかったと述べている。そして、一〇月一三日、中央政治局は人民志願軍が朝鮮に出動する最終的な決断を下すのである。

第三章においては、第一次戦役（一九五〇年一〇月二五日から一一月五日まで）、および第二次戦役（一一月二五日から一二月二四日まで）における戦況の推移と停戦交渉に臨む中国の基本的な姿勢が検討されている。一九五〇年秋から冬にかけての人民志願軍の快進撃によって、北上を続けていた国連軍は大きく押し戻され、戦争開始以前の北

朝鮮領域はほぼ回復された。安田君は戦況の推移を克明に追うとともに、人民志願軍総司令員であった彭徳懐と北京の毛沢東の間に確執が生じる経緯を詳細に描いている。彭徳懐は、第一次戦役の段階からすでに兵士の休養と物資の補給の必要性を痛感し、それらを確保するために第二次戦役を進める必要があると考えたのに対して、毛沢東は第二次戦役を、戦局を一変させるために必要と考えたという。また、人民志願軍が北緯三八度線を南に越えて進む必要性について、彭徳懐は部隊の置かれた困難な状況からその軍事的意義を認めなかったが、毛沢東はそれに政治的意義を認めて三八度線突破を主張した。政治的意義とは、この突破によって中朝側が政治的有利な立場に立って停戦交渉に臨むことができるということであった。安田君が資料に基づいて示すところ、毛沢東は実際の交戦以前から、米国との外交交渉をすでに想定していたのであった。結局、彭徳懐は譲歩し、三八度線を越えることに同意した。その後も人民志願軍はしばらく快進撃を続けるが、それによって彭徳懐と毛沢東の確執はさらに深まることになったと安田君は述べている。

第四章では、一九五〇年末から五一年五月中旬にかけて行われた三つの戦役における、中国側の停戦交渉に関する態度が検討されている。第三次戦役（一九五〇年一二月三一日～一九五一年一月八日）において、人民志願軍は三八度線を南に大きく越えて進撃し、ソウルを占領した。毛沢東は中朝側が有利な立場に立っていると主張したものの、実際には兵力の消耗が激しく、また補給線も長く伸び切っていたため、一九五一年五月に国連政治委員会が停戦をめぐる決議を出したことをきっかけに、停戦交渉の基礎に関する提案を行った。安田君の解釈に従えば、このとき軍事的な苦境に置かれた中国側は、交渉を開始する糸口を探していたのであった。それに先立ち、国連軍側が優勢な火力と機動力を頼みとして反攻を開始すると（第四次戦役、一九五一年一月三一日～四月一〇日）、人民志願軍はいっそう苦しい立場に立たされていた。彭徳懐が認めたように、同軍は「後が続かない状態」に陥り、三八度線以北まで後退することを余儀なくされた。中国としては、このように劣勢に立たされた状況下で停戦交渉を受け入れるわけにはいかなかった。そこで、防御から攻勢に転じて戦争の主導権を奪い返すことを目的に、中国側は第五次戦役（一九五一年四月一九日～五月一七日）を開始した。この戦役は戦果が大きければ大きいほど、停戦交渉を有利に進めることができ、戦争を早く終えることができるという認識のもと

で行われたという。これまで、毛沢東がいつ停戦交渉の受け入れを決断したのかについて議論が分かれていたが、安田君はさまざまな資料の検討を通じて、一九五一年五月末から六月初旬にかけてであると結論づけている。

第五章においては、一九五一年六月から開始される停戦交渉に臨む中国側の方針が検討されている。第五次戦役が終了するのとほぼ時を同じくして、停戦交渉開始を模索する動きが、ケナン（米国務省顧問）・マリク（ソ連国連代表）会談という形で始まった。この会談が始まるとすぐに金日成が北京に到着し、毛沢東、周恩来らと協議を行った。安田君のみるところ、これは停戦交渉に関する協議のためであるとともに、戦場における指揮権をめぐり生じていた中朝間の亀裂を修復するためでもあった。だが、協議によっても見解は一致せず、なおかつスターリンに意見を求める必要があったため、急遽、高崗と金日成がモスクワを訪問することになった。安田君は、モスクワと北京の間で交わされた電報の内容を入念に検討することによって、中朝側が「停戦」、「休戦」、「講和」の概念について認識がきわめて曖昧であったこと、中朝ともに戦争終結の方法と戦後の展望を何ら持ち合わせていなかったこと、および中国側が台湾問題を棚上げしてまで停戦を望んでいたものの、同時に大規模反攻を準備していたことを明らかにしている。中国側は、交戦している双方が三八度線から一〇マイル撤退し、そこに緩衝地帯を設けることによって、開戦以前の状態を回復することを骨子とする方針をもって交渉に臨もうとしたが、同時並行的に大規模反抗を準備するという方針には変化がなかった。そのため安田君は、停戦交渉を受け入れた際には、中国側には交渉についての確固たる目標も展望も欠けていたと結論づけている。それは、戦況の苦しさから戦闘を暫時停止したいとの願望、中朝間での戦争指導をめぐる齟齬、ソ連からの不十分な兵器援助、交渉前に反攻によって有利な立場を築いておきたいとの計算が入り混じった結果であったというのである。

第六章は、一九五一年七月一〇日から始まった停戦交渉における中国側の態度の検討にあてられている。本格的な交渉開始の前に議案を定める段階で、中国は外国軍隊の撤退を議題に含めるよう強硬に主張したが、それはスターリンの指示によるところが大きいと安田君は指摘している。本交渉が始まると、どのような状態で停戦するか、すなわち軍事分界線を戦争開始前の三八度線とするか、それとも現接触線とするかが対立点となった。この点をめぐって交渉は延々と続いたが、同年八月から一〇月にかけての国連

軍による夏季攻勢、秋季攻勢によって交渉がいったん中断された後、一〇月末から一一月上旬にかけての中朝側の反撃が一定程度の成果を収めたことによって、中国側は三八度線案に固執することをやめ、現接触線案に同意したのであった。安田君のみるところ、中国側の態度に一貫していたのは、中朝側が攻勢に立つなかで交渉を行うこと、すなわち「戦いながら交渉する」という姿勢であり、まず停戦してから交渉を行うことではなかった。だが、そのような中国側の姿勢は、北朝鮮と齟齬をきたしていたという。安田君は、北朝鮮側の中国に対する不満が具体的にいかなるものであったかを明らかにするまでには至っていないが、当時、モスクワ―北京―平壌の間で交わされた電文および指導者たちの発言内容を吟味するなら、軍事分界線の確定、および外国軍隊の撤退に関する北京の譲歩案に対して、平壌側の不満が高まっていたと十分に推察できるとしている。

第七章においては、国連軍の夏季攻勢および秋季攻勢によって二ヵ月余りにわたって中断されていた停戦交渉が再開された後、軍事分界線をめぐる交渉の妥結に至るまでの中国の態度が検討されている。一九五一年一〇月二五日、停戦交渉が板門店で再開された。安田君によれば、交渉再開は中国側の公式戦史が強調するように、国連軍の攻勢を中朝側が巧みに「粉砕した」結果ではなく、中朝側が戦況の悪化によって不本意ながら再び交渉のテーブルに着くことを余儀なくされた結果であると理解するほうが適切なのである。中朝側は交渉過程において、軍事分界線の問題をめぐり二段階の譲歩案を準備したという。すなわち、現接触線に「全面的な調整を加える」ことから「若干の調整を加える」ことにとどめる案へと譲歩し、それでも妥結に至らない場合には、現接触線そのものを採用するという譲歩案である。中朝側は三八度線の南に位置する開城の領有に固執したが、それでも中国は何とか早期に妥結を図ろうとしていたと安田君は述べている。結局のところ、軍事分界線の確定は棚上げする形で、国連軍側は中朝側による現接触線を軍事分界線とする提案に同意したのであった。

安田君のみるところ、中国は軍事と政治の整合性を保つのに一貫して苦慮し続けていた。戦局の変化を政治目的の達成に結びつけることを目指していた中国は、自らが有利となる局面をあくまで追求し続けたが、戦局はそこまで中朝側の優勢とはならず、一進一退を繰り返したからである。その結果、戦争をどう終結させるかに関する展望がますます曖昧となり、戦争の終結はますます先送りされることとなったという。

軍事分界線の確定に続く難題は第三議題、すなわち「停戦の実現と休戦の具体的措置」の取り決めであった。この問題を利用して停戦交渉を軍事の領域から政治の領域へと移そうとした中国の努力について考察を加えているのが第八章である。中国は連合国側による休戦査察に関する提案を内政干渉であると批判するとともに、中立国代表（ソ連を含む）による査察を提起し、自らの立場を広く国際世論に訴えようとした。同時に中国は朝鮮半島沿岸島嶼からの国連軍の撤退を要求し、北朝鮮の政治的存在の保障を国際社会に求めた。安田君は、外国軍隊の完全撤退という政治的目標の達成がほぼ絶望視される状況において、これが中国の取りうる唯一の政治的選択肢であったと述べている。中国が「交渉を政治問題化」する動きは、第五議題、すなわち各国政府への建議事項をめぐる交渉にも顕著にみられたと安田君は指摘する。というのも、中国は「朝鮮半島問題の平和的な解決等の問題を協議する」ことを主張し、ここにおける「等」のなかで台湾からの米軍撤退という目的を朝鮮戦争と関連づけようとしたからである。軍事情勢がなお中朝側にとって不利であった――人民志願軍は慣れない陣地戦の戦略に転換しつつあったが、それには時間がかかった――ために、台湾統一を明示することなく、「等」という表現にとどめたことは、あまり強硬な態度を示して交渉を決裂させたくないという中国側の願望の現れであったと安田君は解釈している。

第九章においては、停戦交渉の最後にして最大の障害となった捕虜送還問題をめぐる中国の対応が検討されている。よく知られているように、第四議題、すなわち捕虜送還に関して、中朝側が一括送還を主張したのに対し、国連軍側は捕虜の意思を尊重する任意送還を主張して鋭く対立した。安田君によれば、この問題に関して当初、毛沢東（およびスターリン）は比較的容易に妥結に達するものと楽観的にみていた。だが、中国側は国連軍の捕虜となった人民志願軍・北朝鮮軍兵士十三万二千四百七十名のうち、帰国を希望するものが七万名にすぎないと聞かされ、大きな衝撃を受けた。これは新生国家である中華人民共和国の面子を大いに失わせる数字であったからである。だが、一括返還の主張を後押しするだけの軍事的な能力は、中国にはすでに残っていなかったという。安田君は、捕虜送還をめぐる交渉の過程と戦況の推移を緻密に関連づけながら、ソ連から十分な軍事的支援を受けられず、また送還を望まない捕虜の割合が中国と北朝鮮では大きく違っていた――朝鮮人民軍捕虜よりも人民志願軍捕虜のほうが、祖国への送還を望

んでいなかった――ため、北朝鮮との間にも矛盾が生じていた中国は、譲歩を重ねざるをえなかったと述べている。結局のところ、一九五二年八月末、捕虜送還問題を棚上げする形で、中朝側と国連軍側は停戦協定草案の中国語、朝鮮語、英語の各国語版を交換したのであった。

第十章は、一九五二年末から人民志願軍が取り組んだ、予想される国連軍の着上陸作戦への準備とそれに関連する軍事活動、およびそれらの背後にあった中国の企図と苦悩の検討にあてられている。一九五二年一〇月八日から停戦交渉が無期限休会となった後、人民志願軍は国連軍が頻繁に着上陸作戦演習を実施していることに注目した。そして、一九五〇年夏に戦局を逆転させた仁川上陸作戦が再演されることを真剣に恐れた。毛沢東は、敵が五個ないし七個師団をもって朝鮮半島西岸へ大挙着上陸および空挺降下してくることが確実であるとみなし、これに対する万全の備えをしておくよう人民志願軍司令部に命じた。実際には行われることのなかったこのような作戦を、中国が強く恐れた理由として、安田君はソ連からもたらされた情報をあげている。国連軍の着上陸作戦に大いなる脅威を感じた毛沢東は、スターリンに対して繰り返し支援要請を行うが、モスクワからの返答はいつも北京を落胆させるものでしかなかった。そのため中朝側は、大規模な着上陸作戦に対応できる態勢とは程遠い状態にあったという。そこで、毛沢東は「政治動員」――任務を完遂させるために部隊に対して教育と思想工作を行うことを指す――を重視するよう要求したが、これは安田君のみるところ、部隊内で戦闘に対する自信喪失や厭戦気分が広がりつつあったことを物語るものであった。人民志願軍は、戦争の継続が事実上困難となる状態にまで追い込まれていたというのである。したがって、一九五三年三月五日にスターリンが死去したことは、中国にとって戦争終結のための千載一遇の好機となったのであった。

結論においては、まず停戦協定調印直前の一九五三年七月一三日から人民志願軍が行った「金城戦役」の動機が検討されている。これは捕虜送還問題が紆余曲折を経て、捕虜をいったん中立国送還委員会に引き渡すという方式で妥結した後、それに不満を抱く李承晩政権が抑留する捕虜二万五千人を釈放したことに対する中国側の強烈な不満を背景としたものであった。安田君によれば、停戦協定調印の一歩手前で始められたこの戦いは、中国が政治的体面を保つために発動したもので、何ら交渉に影響を与えようとするものではなかった。

次に安田君は、本研究の要諦をあらためて次のように述べている。第一に、中国の参戦は、眼前に立ちはだかる米帝国主義の脅威を除去し、国際社会のなかで抑圧され続けてきた中国の地位を逆転させる好機としてとらえられた。したがって、中国の参戦決定はあくまで「確信的で意図的で主体的なもの」であった。第二に、人民志願軍が国連軍を三八度線まで押し戻した時点から、この戦争を通じていかなる政治的成果を得るべきなのかに関する中国の苦悩が始まった。それは、米帝国主義をさらに攻撃して朝鮮半島から駆逐することで満足すべきか、それとも台湾から米国が手を引くことまでも追求すべきなのか、という問題をめぐる苦悩であった。第三に、国連軍の総反攻を受けて窮地に追い込まれると、中国は米帝国主義を物理的に駆逐することよりも、それに対する中国の抵抗力を世界に見せつけながら、戦争に敗北することなくそれを早く終わらせることを目指した。第四に、停戦交渉に関して、毛沢東は「戦いながら交渉する」という方針を堅持したが、この方針が戦争を通じて何を得るべきか、戦争をどう終結させるかについての展望を曖昧にしてしまった。戦争目的をめぐる中国の混乱は、この戦争の「全過程を通じて」北朝鮮およびソ連との間に軋轢を抱えていたがゆえに、いっそうはなはだしいものになった。最後に、それでも中国は朝鮮戦争を通じて、国際政治の複雑性を学び、米国との駆け引きの仕方を習得し、自らの存在を世界に印象づけることに成功したという意味で、計り知れない教訓を得たのである。

本論文の評価

本論文の最大の特徴は、朝鮮戦争の戦況の推移と停戦交渉における中国の立場の変化を並行的に、しかも可能な限り克明に描き、両者の関連を明らかにしようと試みている点にある。いうまでもなく、いかなる戦争においても、具体的な戦局は戦争を終結させるための交渉に影響を与える。だが、朝鮮戦争において中国は、毛沢東が唱えた「戦いながら交渉する」という方針を貫いたため、軍事と政治を無媒介的に直接連結してしまった。そのため中国は、戦場での旗色が悪くなると、交渉においては果てしなく譲歩を繰り返し、逆に旗色がよくなると、今度は交渉の値をつり上げた。これによって中国は、人民志願軍が国連軍を三八度線まで押し戻した後、すなわち戦争の見通しに大いなる希望が生じた後、かえってこの戦争の目的を定式化することができなくなってしまった。それ以降、中国の戦争目的は、ある種の迷走を続け、国連軍の朝鮮半島からの駆逐、北朝

鮮の存続、米国に台湾から手を引かせること、国際社会における反帝国主義・民族解放闘争のリーダーとしてのアピール――これらの間でいかに折り合いをつけるかをめぐり、深い混乱に陥ったまま停戦を迎えた。そして、その結果として、台湾「解放」という政治的目標は達成されず、捕虜送還問題の処理過程において人民志願軍捕虜の多くが中国への送還を望まないという政治的敗北の危機に直面したというのである。このような観点は、新しい資料に基づき戦況の推移と停戦交渉に臨む中国側の態度変化の連関を克明に検討したがゆえに到達しえたものであり、停戦交渉を扱った従来の研究――例えば、喜田昭治郎（一九九三）、Shu Guang Zhang（1995）、和田春樹（二〇〇二）、William W. Stueck（2002）、服部隆之（二〇〇七）など――には見られないユニークな観点であり、価値ある見解であるといいうる。

以上のような軍事と政治の関係についての中国の態度は、安田君も示唆するように、過酷な革命戦争を戦い抜き、「鉄砲から政権が生まれる」ことを教訓とした中国共産党が、革命の延長線上に朝鮮戦争を戦った経験に基づいているのであろう。そのため、政治の延長線上に軍事があるというより、軍事が政治の父であり母ともなっていたのである。このような態度によって、同党は停戦交渉においては、あくまで力の観点からみて優位な立場から交渉を進めることに執着し、それがかなわなければ今度は無原則的にずるずると譲歩を繰り返した。安田君は、観察結果の現代的意義を語ることに抑制的であるが、朝鮮戦争の停戦交渉をめぐる以上のような中国の態度は、たしかに今日における中国の外交交渉にも通じるものがある。その意味で、本論文の射程は一九五〇年代を大きく超えるものとなっている。

戦況の推移に関する安田君の記述は、各総部・軍区・軍種の動きから軍団―師団―連隊の配置、兵員・兵器・食糧などの補給を含む兵站の状況に至るまできわめて詳細である。このような記述は、安全保障の専門家としての安田君の軍事問題に関する豊富な知見をもとに、近年中国側が公開した資料への周到な目配りによって可能となったものである。同君が利用した資料は、公式の戦史から北京と現地の人民志願軍司令部との間で交わされた電報、毛沢東によるさまざまな指示、停戦交渉の当事者たちの記録、軍人たちの回想録に至るまで、実にさまざまなものにおよぶ。とりわけ、毛沢東とスターリンの間で交わされた大量の電文の読解を通して、北京の指導者たちがモスクワに対して繰り返し行った支援要請とモスクワの指導者の冷淡な態度の

コントラストを生き生きと浮かび上がらせている点は興味深い。そのため、本研究は朝鮮戦争に関する最新の信頼すべき軍事史としてだけでなく、中ソ関係史の新しい成果としても読むことができる。

だが、本論文にもさらなる検討を要する課題がないわけではない。第一に、事実の解明という点で、いささか物足りなさを感じる部分がある。例えば、安田君は戦争が始まって以来、中朝間に絶えず生じた軋轢に繰り返し言及しているが、それが何をめぐるものであったかについては、推測がなされるのみで具体的資料に基づく考察が欠けている。それは、人民志願軍内に広がっていた可能性があるとされる「厭戦気分」についても同様である。とはいえ、これらは資料の公開状況に鑑みれば、ないものねだりであるといえるかもしれない。だが、一九五一年四月にトルーマン大統領が並外れた軍事的野心をもつ国連軍総司令官マッカーサーを解任した際の中国側の反応や、一九五三年にワシントンが停戦交渉を急がせるために核の脅しをかけた際の北京の反応は、現在利用できる資料によっても、十分明らかにしえたであろう。

第二に、広範な文献の利用という点に関わるが、アメリカ側の文献の利用がいささか不足しているように思われる。本研究を戦史として読む場合、読者は中国側の公式戦史の記述に潜む問題点を安田君の指摘を通じて理解することができるとはいえ、中国側が主張する「戦果」、とりわけ各戦役・戦闘ごとの死傷者数や兵器・装備の損耗について――安田君は随所でこれを示している――それが事実であるのかどうかは、アメリカ軍側の主張と照らし合わせてみないかぎりはわからない。戦況の推移とそれをめぐる中国側の認識の変化を関連づけて描くためには、これは必要な作業であろう。

第三に、何が安田君自身のオリジナルな観点であるか、必ずしもそれを明瞭に浮かび上がらせる書き方になっていない場合がある。例えば、参戦に関する中国の決定についてがそれである（もっとも、全体としてみた場合、本論文の力点は明らかに停戦交渉の過程の分析に置かれているのであるが）。中国側の公式戦史と異なる見解を安田君が多くの個所で打ち出す際と同様の明晰さをもって、中国内外で蓄積されてきたこの戦争に関する史的研究とも異なる見解の独自性を、いま少し際立たせる書き方をすべきであったように思われる。

最後に、読者の便宜という観点からすると、本研究には膨大な数の地名が登場するが、それがどこに位置するのか

を示す地図があったほうがよかったし、またいくつも登場する軍事用語（例えば、「運動戦」、「縦深防御」、「機動後備部隊」など）についても簡潔な説明があってしかるべきであった。

とはいえ、以上において指摘した課題は、朝鮮戦争に対する中国の関与、とりわけ停戦交渉をめぐる軍事と政治の関係について本研究が成し遂げた大きな学術的価値をいささかも揺るがすわけではない。したがって、審査員一同は、本論文がきわめて学問的価値の高い業績であると判断し、ここで示された安田淳君の学識が、博士学位（法学、慶應義塾大学）を授与するに十分に値する内容であると信じるものである。

二〇二三年一〇月三日

主査　慶應義塾大学法学部教授　法学研究科委員・博士（法学）　高橋　伸夫

副査　慶應義塾大学法学部教授　法学研究科委員・博士（法学）　小嶋華津子

副査　慶應義塾大学名誉教授　博士（法学）　山田　辰雄